芸術科　音楽Ⅰ　学習指導案

授業者 　居城 勝彦

|  |
| --- |
| 本授業の要旨　生徒たちが自ら演奏表現を深めるためには、楽曲理解が欠かせない。本単元では楽曲の成立背景、特に作詩者への理解を通して歌詞に綴られた言葉を意識し、アカペラ混声四部の歌唱表現を深めることをねらう。そのために司書との恊働によるブックトークを取り入れる。本時では、生徒たちがブックトークで知り得た作詩者に関する情報を活用し、意図を持って演奏表現する姿を期待する。 |

# 1. 研究主題との関わり

## （1）本校で育てたい生徒像と，本単元で育てたい「資質・能力」との関係

芸術科音楽において、合唱という演奏形態での表現活動を通して育てたい生徒とは、「指導者の解釈に基づき、指導者の提示する歌唱技術を使って表現する姿」がゴールではない。育てたい生徒の姿とは、「楽曲と実直に向き合い、自主的に楽曲理解を深めようとし、仲間とともに演奏表現を試行し、その手応えから次なる演奏表現に向かおうとする姿」である。

本校の音楽Ⅰでは、年間を通しての本質的な問いと指導目標として「音楽の諸活動を通して、生涯にわたり音楽を愛好する心情と音楽文化を尊重する態度を育てるとともに、感性を磨き、個性豊かな音楽の能力を高め、人々が永きに渡って大事にしてきた“音楽文化”について追究する。」を掲げている。教材として楽曲に出会い、その成立背景にある作詩者や作曲者について考え、演奏することは、音楽文化について追究する１つの方法であると捉えている。

## （2）育てたい「資質・能力」を評価する方法

合唱においては、互いのパートを聴き合い、自分たちの楽曲理解に基づいたより豊かな歌唱表現を意識した演奏を試み、手応えを感じるという一連の活動の連続の中で目指すべき資質・能力が培われる。

本活動では、毎回の授業で活用している学習カードに記入された学習感想、ブックトークで得た情報を整理し自分やパートの表現へと意識を向けるためのワークシート、演奏しながら得られる手応えを評価の対象とする。活動の場面に応じて、自己評価や他者評価を用いるが、必ずしも演奏の手応えを言語化することを意図してはいない。

# 2. 対　象　　　1年

# 3. 単元名　　　歌唱表現を深める

# 4. 単元の目標　作詩者への理解を通してアカペラ混声四部合唱の演奏表現を深めよう

# 5. 単元設定の理由

## （1）生徒たちの実態および本単元に至るまでの学習

知識理解よりも表現活動を好む生徒たちである。さまざま問いかけに対して静かな反応を示すが、思考や演奏に消極的な訳ではない。２学期の歌唱では、ミュージカルナンバー（「Memory」）や日本歌曲(「小さな空」「むこうむこう」「落葉松」)をドラマティックに表現することをテーマにして独唱（斉唱）に取り組んでいる。合唱ではピアノ伴奏付き混声４部合唱（「落葉松」）、西洋音楽史の学習と関連させてルネサンス期のアカペラ（「Kyrie」パレストリーナ作曲）に取り組んできた。

## （2）教材の特性と授業者の手立て

本単元ではアカペラ混声４部「むらさきつゆくさ」（星野富弘作詩　なかにしあかね作曲）を教材とする。曲名の「むらさきつゆくさ」は歌詞として出てこない。その点を不思議に感じている生徒がいる。本時では、司書によるブックトークから生徒の中で詩作に関するさまざまな類推が始まるだろう。それが楽曲理解につながるはずである。

また、授業者と司書との恊働は音楽担当者が１人しかいない学校において、他にも生徒たちの音楽表現を支えてくれる人が校内にいることを知るための意義ある設定である。授業者の手だてとしては、

1. 個々の生徒が作詩者に関して知り得た情報から詩「むらさきつゆくさ」に表現された内容を類推し、それらを活用した歌唱表現への意識としてワークシートへの言語化する。
2. パート内で歌唱表現として共有化を図り、拡大楽譜に張り出す。
3. クラス全員での歌唱表現として意識するポイントを集約する。

の３段階を踏むことを提示する。

# 6. 指導計画

## （1）単元計画（全４時間）

第１次　パート内で協力し音取りをし、通奏できるようにする。（2時間）

第２次　詩に対して自分なりの着眼点で楽曲理解を深め、それらをパート内で共有し、クラス全員で

　　　　の歌唱表現として意識して演奏する。（2時間）：本時

## （2）本時の学習（3および4 時間目/ 全4時間）

### ①本時のねらい

司書によるブックトークから作詩者について知り、詩に対して自分なりの着眼点で楽曲理解を深め、それらをパート内で共有し、クラス全員での歌唱表現を深める。

### ②本時の授業展開

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
| 時間 | 学習の流れと生徒の活動 | 教員の指導と手立て |
| 1時間目20分 | ・思いを込めたドラマティックな表現を意識して既習曲を歌唱する。・「むらさきつゆくさ」を演奏する。 | ・これから始まる歌唱活動へのウォーミングアップである。歌うことに対して開かれた心と身体を準備する。生徒たちの歌唱表現を支えるピアノ伴奏を心がける。・テンポや曲の入りのみを提示する。指揮に頼らず、お互いのパートを聴き合いながら演奏することを意識させる。 |
| 30分 | ・司書によるブックトークで「星野富弘」に関する理解を深める。 | ・授業者は生徒がメモに活用できるようなキーワードをスクリーンに提示する。また、司書の紹介する書籍や資料を生徒に見やすいように並べる。休憩時間に手に取る生徒から質問や感想が出るようなら、司書とともに対応する。 |
| （　休憩　　10分　） |
| 2時間目35分 | ・ブックトークから知り得たことをもとに、各自が意識して表現する箇所と内容をワークシートに記入する。・パート内で意見を共有し、拡大楽譜に意識すべき内容を付箋紙で貼っていく。貼った内容が表現できるようにパートで練習をする。・他のパートが拡大楽譜に張った付箋紙の内容も参考にしながら楽曲理解を深める。・クラス全体の演奏で意識したいことを考え、必要に応じて部分的に練習をする。 | ・書籍や資料も見てよいことを伝える。・書き方に困っている生徒には演奏するときに、何を意識しようとするのかを記入させる。ただし、無理に言語化させることはしない。・パート内での共有の進み具合を見守り、必要に応じて意見を伝えたり、演奏に加わったりして、安心して演奏に取り組める環境づくりに努める。・付箋紙の内容や重なりからこのクラスの傾向を読み取り、それを意識できるような言葉を生徒たちと一緒に探し、提示する。 |
| 15分 | ・この時間のまとめの演奏をする。・今日の振り返りを記入し、提出する。 | ・曲の構造や作曲者への意識が記述されていれば触れ、楽曲理解への大事な視点であると伝える。・授業後はブックトークで紹介された書籍が図書館で特集展示されることを伝える。 |

# 7. 主な参考文献および資料

○教材曲

・無伴奏混声合唱組曲「思い出の向こう側」から

　　　　　　　　　　　　　「むらさきつゆくさ」（星野富弘作詩　なかなしあかね作曲）カワイ出版

○ブックトークで紹介する書籍、楽曲

・「あの時から空がかわった」星野富弘、いのちのことば社、2016年。

・「山の向こうの美術館」星野富弘、偕成社、2005年。

・「かぎりなくやさしい花々」星野富弘、偕成社文庫、2004年。

・「舟越保武−まなざしの向こうに−」舟越保武、求龍堂、2014年

・「「私」を受け容れて生きる−父と母の娘−」末盛千枝子、新潮社、2016年。

・「八木重吉詩集」八木重吉、思潮社、1988年。

・「明日も」（SHISHAMO　　宮崎朝子　作詞作曲）

○参考曲

・星野富弘の詩による歌曲集「二番目に言いたいこと」(星野富弘作詩 なかにしあかね作曲)カワイ出版

・「むらさきつゆくさ」（星野富弘作詩　相澤直人作曲）カワイ出版

・混声合唱とピアノのための「花に寄せて」（星野富弘作詩　新実徳英作曲）カワイ出版

・「秋のあじさい」（星野富弘作詩　なかにしあかね作曲）MOUSA2 教育芸術社

・星野富弘の優しい詩の世界をなかにしあかねの音楽でつづる「今日もひとつ」ALM RECORDS 2010年

○参考文献

・「星野富弘の詩による歌曲の世界：なかにしあかね「二番目に言いたいこと」を中心にその魅力を探る」　西由起子　フェリス女学院大学音楽学部紀要11巻　2011年。